

編集後記

■自己紹介 第10号から昨年の34号までの4半世紀に渡り翔友編集長を務められた窪田先輩に代わり35号よりの編集長を拝命しました、真部朋仁(マナベ トモヒト)と申します。1976年入学、2回生の1977年から航空部入部、1980年:昭和50年に卒業いたしました。航空部に在籍したのは3年でした。今回、西山会長より翔友編集長の就任を打診された際には、知っているOB/OGの年代が少なく、原稿を集める自信がなく固辞しておりました。自家用免許や整備士の資格を持たない私でも航空部に寄与できることでは、と思ってお引き受けいたしました。

■写真紹介 私人の写真では、恥ずかしいので4名の卒業同期のうち3名が会した写真を掲載します。中村正陽旧主将(中央)が今年1月に全国都道府県対抗女子駅伝の応援で西京極陸上競技場にこられた際に撮影したものです。向かって左側が、1970年代の超人気番組“ラブ・アタック”にて同志社大学卒で、今では流行作家の百田尚樹氏と覇権を争っていた若代善彦さんです。私は右です。あと、卒業同期の上ノ山氏もお元気でられます。



■今、私が思う年会誌「翔友」の意義 前号の編集後記に窪田先輩が翔友誕生の経緯をお書きになっています。翔友の初号は、創部50周年記念事業の“航空部50年誌”で、翌年の“翔友Ⅱ”で終えるはずであったが、継続の声が強く「翔友会の機関紙と現役部の部誌を兼ねて年刊として発行を継続することとなった。」とあります。表紙をご覧ください。『同志社大学航空部誌』と記載されています。

翔友の意義は三つあると思います。①現役の活動を翔友会員に伝える。例えば、今年は新型コロナにより、卒業式と入学式は中止。5月中まで大学入構は禁止で新入生勧誘もままならない状況です。2020年度を現役諸氏がどの様に乗り越えたかの記録は残さねばと思っております。②それぞれの年代の苦勞を伝える。他界された北尾教官がその昔、こう言われたのを何故か憶えております。「苦勞も引き継いで行かんと、いかん」。私が翔友会の活動に加わり出したのは15年ほど前ですが、先輩の方そして後輩の方にお会いして話をすると、それぞれの時代にそれぞれに課題や問題があり、それらを乗り越えた84年の歴史と分かり出しました。北尾教官のお言葉の意味をやっと理解し始めた近年です。本号で入学同期の青木君に投稿をお願いしたのは、そういう趣旨でした。各年代の苦勞や活躍も紙面に残したいと思いますので、ご協力よろしくお願ひします。③翔友会員同士の交流のお手伝い。本号の訃報欄に、中村悟志氏が寄稿した追悼文の題を「まぼろしとなった全員揃っての同期会」とされています。皆様には、会える時に会って頂くようお願い申し上げます、本誌もそのお手伝いが出来ないかと思っております。翔友のあるべき姿については、皆様のご意見をいただきたく思っております。

■お詫びとお願ひ。本号はページ数わずか30ページと大変軽量になりました事をお詫び、申し上げます。編集長を引き受けるに当たり、西山会長には編集局の設立をお願いしました。方針②のためには、多くの世代の方のご協力が必要です。単年度で十分ですので、編集局員になっていただきたいと思っております。③につきましては、同期やその前後で集まった写真等ありましたら、ご寄稿ください。結婚式の写真も歓迎です。翔友会員と現役部員の皆様のご協力をお願い申し上げます。



翔友 35 〈非売品〉 編集 翔友会

2020 年 6 月 17 日 発行 同志社大学体育会航空部

印刷 同志社大学プリントステーション
